

## ブラジル・サンパウロにおける朝鮮人コミュニティの諸相 ～植民地期朝鮮移民および1956年青年移民の出会いを中心に～

全 淑美

はじめに

1. 戦前朝鮮移民としてのつながり
  - 1) 朴学基と李重昶、そして張昇浩
  - 2) 張昇浩と金永斗一家
  - 3) 金壽祚と戦前移民
2. 戦前移民としての連帯感
3. 朝鮮人コミュニティの誕生
  - 1) 張昇浩を中心に
  - 2) 金壽祚を中心に
4. 同胞組織と在伯朝鮮人としての連帯感
  - 1) 移民一世と韓伯人会
  - 2) 朝鮮人というゆるやかな民族意識
5. まとめにかえて～1962年以前の朝鮮人コミュニティと新しい出会い

キーワード：戦前朝鮮移民、1956年朝鮮青年移民、同胞、交流、コミュニティの形成

はじめに

ブラジル経済界でも重要な位置を占める韓国

系コロニアであるが、1962年入国の文化使節団という名の移民14名を最初とした、大韓民国期の移民を中心に形成されているという見方が一般的で、先行研究もこの時期を中心に進められてきた<sup>1)</sup>。その一方で、植民地期朝鮮に日本国籍で移住した人々（以下戦前移民）や1956年に入国した朝鮮戦争元捕虜の青年移民（以下56年青年移民）については、それぞれの論文で「移民前史」として位置づけ、フィールドワークを中心に研究が進められてきた。しかしながら、戦前移民については「移住した年代は正確にはわからない」<sup>2)</sup>とされてきた。

ところが、近年、一次史料の閲覧が容易になり、戦前移民の上陸時期について特定が可能になった。その一部は『東アジア研究』第46号<sup>3)</sup>ですでに論究した。しかしながら、入国方法は様々考えられ、正確な移民数はつかみようがない。事実、同上で紹介した朴学基は、1918年、従事していた船を下り、そのまま滞在していた

1 主な研究に、玄圭煥『韓国流移民史（下）』三和印刷（株）出版部、1976年、ソウル。李求弘『韓国移民史』中央日報東洋放送、1979年、ソウル。両者とも韓国移民史全体を扱いながら、各章でブラジル移民史について言及している。ブラジル移民のみを対象にした研究には、全京秀『브라질의 한국 이민-인류학적 접근-』ソウル大学出版部、1991年、ソウル（以上、原文：ハングル）。Keum Joa Choi『韓国

移民史：虹を超えて』サンパウロ大学修士論文、1991年、サンパウロ（原文：ブラジル語）等がある。

2 全京秀、同前、21ページ

3 全淑美「日本植民地時代に『契約移民』としてブラジルへ移住した朝鮮人一家」『東アジア研究』第46号には欄外記述を含め、10名の存在を確認、紹介した。

ことが2009年の調査で正式に判明した<sup>4</sup>。アルゼンチン韓国移民史においても同様の事例を認めている<sup>5</sup>。

さて、全京秀（1991）は、フィールドワークで得られた戦前移民に関する情報を総合して分析する際、戦前移民を家族構成の視点から、家族移民と独身移民に二分した。そして「その業績は微々たるもので、詳細な足跡事項や彼らの生活について深く知ることはできなかった」<sup>6</sup>とし、さらに同一地域に住んでながら婚姻関係を結べなかった事実など、調査結果を総合的に判断し、双方での「交流はなかったと判断」<sup>7</sup>した。確かにこの時期、朝鮮人は民族系コロニアを形成するほどの人数でもなく、特に目立った組織活動もなかったため、一見、交流がないようにみえる。

ところが、1956年50名の同胞を迎えたことにより、それまで主に日系コロニアで個々に生きてきた人々が、大なり小なり朝鮮人同胞として関係を結び始めたのである。それは全京秀（1991）も認めるところであるが、やはりその背景には、戦前からのつながりが存在していたからこそ、一つの出来事をきっかけに集合できたものと考えられる。

そこで、本稿では、全京秀（1991）のいう「微々たる業績」をさらに掘り下げ、戦前移民の些細な出会いにも注目し、戦前移民と56年青年移民との出会いによる、朝鮮人コミュニティの形成までの過程を追求した。そして、1962年、韓国系コロニアの出発点とも考えられる民族団

体「僑民会」<sup>8</sup>発足以前の在伯朝鮮人たちの人間模様を中心に、交流の様子や築かれたコミュニティがどのような性格のものであったかを考察したい。

考察にあたって、多くのインタビューに依拠することになるが、ブラジル・サンパウロでの調査は、前回の2005年6月10日から8月8日に加え、2007年8月17日から29日、2008年12月25日から12月31日、2009年8月8日から19日までの約80日間行った。その際、どの調査においても、韓国系及び日系コロニアの方々、韓人会、日本移民史料館、サンパウロ人文研究所、三田家等の全面協力を得ることができた。その結果、2008年12月には朴学基の遺族、2009年8月には金昌洙の妻との面会が可能となった。また、インタビューに快諾していただくことにより、新たな事実が判明した。すべてに感謝申し上げる。

加えて、関係者に対し、メールや電話、書簡で確認等を行った。

本稿で紹介した人物はすべて実在の人物であり、本人の了承を得て実名を公表した。その際、筆者と直接インタビュー等に応じてもらった人物に対しては、場面に応じて「氏」を付した。それ以外は敬称を省略した。

なお、国号については、植民地期及び56年青年移民については朝鮮を用いるが、大韓民国期の移民と合流する時点で、彼ら自身が韓国と呼んでいることを考慮し、本稿では双方の呼び方が混在することを了承願いたい。

4 小田セツ子氏は、娘が朴学基の長男と結婚するにあたって、朴学基と何度か会い、本人から聞いたという。

小田セツ子：朴学基の長男の元妻の母。1920年サンパウロ州生まれ。サンパウロ市在住。2009年8月15日娘宅（サンパウロ市）にて聞き取り。

5 「1941年、日本外航船の機関士であったが、ブエノスアイレスに魅了され、下船を決めた」（손정수、

장영철 編集『アルゼンチン韓国人移民40周年史 1965-2005』アルゼンチン韓人移民文化研究院、2005年12月、17ページ、アルゼンチン：原文ハンゲル）

6 全京秀、前掲書、23ページ。

7 同前

8 1962年8月15日発足。初代会長に金昌洙が就任。詳細は全淑美前掲書を参照のこと。

## 1 戦前朝鮮移民としてのつながり

現在確認できる戦前の朝鮮移民は朴学基、李重昶、張昇浩（結婚後三田昇浩と名乗る）、金永斗一家（妻李玉貞、長男金哲洙、二男金昌洙、三男金達洙、長女金惠郷）、金壽祚（日系社会では青木伊三郎という名で知られている）の10名<sup>9</sup>である。彼らはこの広いブラジルの大地で、しかも通信手段もままならない時代に、不思議なことに出会っていた。この章では、上記の人々について、聞き取りを交えながら、戦後間もない頃までの交わりをたどってみる。

### 1) 朴学基と李重昶、そして張昇浩

同業者として交わっていた人々がいる。朴学基と李重昶である。

朴学基の移住は最も古く、漁船あるいは貨物船等の外航路船で働いていた人物で<sup>10</sup>、1918年という大正年間に人国した。一方、李重昶は叔父に従い、農業留学という名目で1927年に入国し、叔父の家族帰国後もサンパウロに残留した<sup>11</sup>。

サンパウロでは、ふたりはともにタクシードライバーという職業に就いていた（写真1）。出会いの切っ掛けは明確ではない。しかし、朴学基の長女アオミ氏は、幼い頃、李重昶の家に「遊びに行ったことがある」「いつもリングを持

写真1 朴学基：タクシードライバーとしての制服姿（朴マリ氏所蔵）



ってきてくれたので、リングのおじさんと呼んでいました」「パパイ（父—引用者注）とは本当に仲がよかった」と懐かしそうに話してくれた<sup>12</sup>。両者は日本語で会話をしていたが、同胞同業者として友情を育てていたものと考えられる。アオミ氏が幼少期であったことや、朴学基

9 朴学基：1892年朝鮮？生まれ、1918年入国、1969年サンパウロにて死亡（以下、全員死亡場所は同様）。李重昶：1912年朝鮮生まれ、京畿道出身、1927年入国、1982年死亡。張昇浩：1907年忠清北道生まれ、1928年入国、結婚後三田昇浩と名乗る、2000年死亡。金壽祚：1905年朝鮮生まれ、入国日不明、ブラジル国籍取得者、1966年死亡。張昇浩以外の人物に関し死亡証明書有り。張昇浩は『南米東亜日報』5月13日付け等。  
金永斗一家：家長金永斗1882年生まれ、妻李玉貞1887年生まれ、長男金哲洙1913年生まれ、二男金昌洙1916年生まれ、三男金達洙1919年生まれ、長女金惠郷1924年生まれ。ともに1931年入国。詳細は全淑美前掲書参照のこと。死亡年は後述する。移住の背景について、金壽祚以外の人物は後日発表予定。  
10 朴寿馬の証言：朴寿馬は朴学基の長男。1939年、サ

ンパウロ生まれ、サンパウロ州在住。現在、会社顧問会計士。2008年12月29日、自宅にて聞き取り。

11 高橋幸春「祖国は遠きにありて」『月刊ジャーナリスト』情報センター出版、1982年、10ページ参照。その叔父が秦学文であること等は、金東成『中南米紀行』（源文閣、1954年、89ページ、ソウル：原文ハングル）にも記されている。李重昶の入国記録は、秦学文の家族として記録されていたにもかかわらず、2007年までの調査では原本閲覧に制限があり、発見できなかった。その後、2008年ブラジル日本移民100周年記念事業の際、発見された。詳細は後日発表予定。  
12 朴アオミ：朴学基の長女。1941年サンパウロ生まれ、サンパウロ市在住。元看護士。2009年8月15日自宅にて聞き取り。

がまだ現役ドライバーであったことから、終戦直前あるいは直後の思い出であろう。

また、1956年の青年移民に対して、朝鮮人の血を引く女性として、朴アオミを彼らに紹介したのも李重昶であった<sup>13</sup>。

その李重昶は張昇浩ともつながりが深く、張昇浩が何かと面倒をみていたという。張の遺族である三田姉妹によると、張昇浩は自分の娘を独身でいた李重昶に嫁がせようとしたり、病床にある李の面倒をみたり、挙げ句の果てには、李重昶が亡くなった折しも、彼の棺を張の長女が眠っている墓とともに埋葬したのであった<sup>14</sup>。

## 2) 張昇浩と金永斗一家

出会いが確認できた中で、最も古い出会いを持つものは張昇浩と金永斗一家であった。彼らは入国日やその背景も全く違っていた。張昇浩は、出稼ぎ労働者として大阪にいた頃、そこで出会った日本自由メソジスト教会の一員であった西住正義を支援するため、1928年に移住した<sup>15</sup>。一方、金永斗は大韓帝国や朝鮮総督府の官吏として勤め上げ<sup>16</sup>、退職の後、1931年移民会社を

通じて、異例とも思われる「契約移民」として家族とともにブラジル移住を果たした人物である。両者の共通点といえば、ともにプロテスタントであったことのみである。『在伯基督新教々徒名簿』1932年版<sup>17</sup>にすでに両者の氏名が記載されており、しかも出身地は「朝鮮」と記載されていることから、その存在自体は互いに知るところであったものと推測される。両者はイタリア系移民の農場で出会ったようで、張はそこで米の栽培を手伝っていたという<sup>18</sup>。この件に関して、張昇浩の遺族に尋ねたが、「アントニオというブラジル人の農場で働いたことがある」<sup>19</sup>というひとつの記憶だけであった。このブラジル人が上記のイタリア系移民の農場かどうかの確証はない。

張昇浩は入国3年後の1931年にはサンパウロ農事実習場、通称エメボイ実習場に篤志作業生として入場し、1933年にその課程を修了した<sup>20</sup>。その後、サンパウロ市郊外のジュケリー（現マイリポラン）にある中沢農場で働くことになった。農場主は中沢源一郎<sup>21</sup>で、後に南伯農協中央会<sup>22</sup>専務理事となる人物である。この農場は

13 金昌彦氏は「李重昶の車で案内してもらった」という。金昌彦：1933年、ハルピン生まれ。咸鏡南道出身、1956年入国。元エンジニア。サンパウロ市在住。2009年8月13、17日、サンパウロ市レストランにて聞き取り。以下、聞き取り場所は同様。

14 通常、ブラジルの墓には2人から4人程度埋葬できるようになっている。李重昶の埋葬証明書から死亡日、埋葬場所が確認できた。

15 張昇浩は、ブラジル日本移民に対する布教のために移住する西住正義を援助する目的で移住したと明言している。1996年の教団60周年記念DVDに本人が登場して語っており、その他高橋（1982）のインタビューをはじめ、さまざまな場所で確認できる。

16 国史編纂委員会作成の韓国史データベース「職員録資料」参照。金永斗の韓国における職業の詳細については後日発表予定。

17 多田栄一郎編『在伯基督新教々徒名簿』1932年版、[多田栄一郎・出版] 1932年、

18 匿名希望Aの記憶：Aはサンパウロ州在住で、金永斗をよく知る人の一人。2008年12月26日、自宅にて

聞き取り。

19 三田幸恵：1944年サンパウロ生まれ、サンパウロ市在住。宣教師。2005年7月17日以後、現在まで、自宅（張昇浩宅）、サウーデ教会等にて聞き取りやメール回答多数。この内容に関しては2009年10月19日メールにて回答。

20 「三田昇浩作業生＝旧姓は張。第一期生の古い連中には馴染が深い人。」（増田秀一『エメボイ実習場史』エメボイ研究所、1981年、308～309ページ：サンパウロ）。エメボイ実習場とは、海外興業株式会社が拓務省（1929年設置）の補助によりサンパウロ市郊外に建設した青年教育機関の一つである。日本全国の公募により学生を選抜したが、ブラジルでも募集され、同時に働きながら学ぶ篤志作業生も募集された。

21 1907年高知県生まれ。1933年移住。1939年、南伯農協中央会専務理事着任（南伯農協中央会創立六十周年記念刊行委員会編『中沢源一郎・人と業績』トッパン・プレス印刷出版 [印刷]、1990年、参照）。張一家とは張昇浩が亡くなるまで交流が続いた。

1934年に創設されるが、1935年頃そこに移ってきたという証言もあり<sup>23</sup>、張昇浩はエメボイ実習場を修了した後、1、2年後に移ってきたものと考えられる。

一方、金永斗一家は1933年には太陽植民地内で独立農業を営むようになっていた<sup>24</sup>。1935年、日本人の紹介でロンドリーナ市に土地を購入し、早々と移り住んでいる<sup>25</sup>。

これらの記憶をつなぎ合わせると、1934年から1935年の間には両者は顔を合わせており、張昇浩にせよ、金一家にせよ、日系コロニアの中に確固たる生活基盤を持っていたことや、同じ宗教基盤を持っていたことなどが出会いにつながったものと考えられる。

戦前、戦中の交流については、張昇浩の遺族には特別な記憶がないという。しかしながら、金永斗やその妻李玉貞、長男金哲洙の死後<sup>26</sup>、兄妹3人との交流は戦後も続いたようで、張昇浩の二女恵美と金永斗の長女恵郷は一つの家で共同生活をし、ともに通勤もしていた<sup>27</sup>。恵美氏の話しぶりから、ふたりの関係の深さよりも、親同士が朝鮮人であるということから、共同生活につながっていったものと思われる。

### 3) 金壽祚と戦前移民

金壽祚は、日系コロニアでも、年配者であれ

ば、その名を記憶している人も意外に多く、実際に交わりを持った人々にも出会うことができた。また、Aに「青木」が朝鮮移民であることを告げると「そうですか、青木さんも朝鮮人だったんですか」と、驚いた様子であった。即ちそれは、Aと金壽祚は日本人社会の延長として交流があったという証でもあろう。また、朴学基の長男朴寿馬氏は、父親は退職後、一時的に「青木さんの仕事を手伝っていました」そのため「小学生の頃、青木さんの家で遊んだことがある」<sup>28</sup>という。これは戦後間もない頃の話と思われるが、子どもには、朝鮮人であれ、日本人であれ、特に気にすることもなく、一方、大人たちは「青木」という日本人名であれ、朝鮮人として交わっていたのであろう。張昇浩の遺族も「青木さん」と呼び、幼少期から知っていたという。

残念ながら、戦前移民一世は皆亡くなっているため確認できないが、その交わりを整理してみると、個別の関係のように見えながらも、それぞれが重なり合い、日系社会に根を下ろした朝鮮人として、互いの存在は既知となっていたと思われる。従って、戦後間もない頃までは、大きなコミュニティと呼べるような集まりはなくとも、それでも互いに朝鮮人として交わっていたものと考えられる。

22 南伯農協中央会は、1929年12月29日ジュケリー農産組合として誕生。1945年、スール・ブラジル（南伯）中央農産組合と改称する（池田重二『聖市北部邦人発展五十年史』日伯文化出版社、1963年、23～28ページ）。さらに現在の名に改名の後、1994年3月30日をもって解散した。（解散日は『パウリスタ新聞』1994年4月5日付け）。

23 「張さんがマイリポランに移ってこられたのは1935年ごろではなかったかと思います。その頃から中沢農場で働くようなられたのだと思いますが、何年そこで勤められたかは解かりません。」水城ジョン氏の証言（2007年8月2日付メール）。水城ジョン：1922年11月14日サンパウロ州生まれ、現在米国カリフォルニア州在住。牧師。

24 全淑美、前掲書、100ページ参照のこと。

25 匿名希望A：前掲出。

26 同前の証言により、1935年金哲洙及び1936年金永斗、ロンドリーナ市にて死亡。1952年李玉貞、サンパウロ市にて死亡。

27 三田恵美：1940年サンパウロ生まれ、サンパウロ市在住。日本食堂経営。2008年12月30日、2009年8月13日、自営食堂にて聞き取り。全淑美（前掲書、102ページ）で交流の具体的内容として、本人の記憶を紹介したが、この2回のインタビューでは金恵郷とイビランガに住んでいたこと、二人で通勤もしたことなどを思い出した。ただし、金昌洙がリンドーヤに引越して行ったことは事実であるが、彼らのもとに住まわされたことは記憶違いであったと記憶の訂正をした。

28 朴寿馬：前掲出。

## 2 戦前移民としての連帯感

1956年2月6日、朝鮮戦争休戦協定後、中立国移住を希望した人々、50数名が、リオデジャネイロに到着した。中国人も数名いたが、彼らは皆無国籍として入国した。しかしながら、戦前移民は一度に50名という朝鮮人同胞を迎えたのである。

パウリスタ新聞によると、ブラジル外務省は戦前に移住した在伯朝鮮人に出迎えの要請をしたらしく、金壽祚、張昇浩、李重昶の3人が空港まで出向くことになった。

「本国送還を拒否し、『朝鮮戦争の落し子』とも言われる北鮮捕虜五十八名<sup>29</sup>は、きのう空路リオに到着した。それに先立って、伯国外務省では、言葉関係もあり、聖市在住の韓国名誉領事金壽祚氏に急遽リオへ来るように要望したところから、・・・」

(『パウリスタ新聞』1956年2月7日付)

興味深いのは、同新聞の見出しに、「送還拒否の捕虜きのうリオへ」に続いて「高麗会を強化、戸籍事務も開始？」<sup>29</sup>という小見出しがついていることである。しかしながら、実際にこのような会が存在していたのかどうかについては、疑わしい面もあるようだ。全京秀(1991)は「張昇浩の陳述に寄れば、前の3人の肩書き(金壽祚：韓国名誉総領事、張昇浩：高麗人会在伯国自由メソジスト教会代表、李重昶：高麗人會會長—引用者注)は全く覚えがな」く、この内容は「新聞記者に偽装組織と急造された肩書きを提供した可能性が高い」<sup>30</sup>と分析している。現在のところ、その真偽は不明である。金

壽祚の「甥」である猪股嘉雄<sup>31</sup>(後述する)は同パウリスタ新聞の営業部で働いていたことから、このような記事が書かれた可能性もある。2007年夏の調査の際、パウリスタ新聞社に記事の照会をしたところ、執筆者は不明であるが、当時は編集部でなくとも記事を書くことは可能であったという回答であった。また、張昇浩の五女幸恵氏の記憶では、金壽祚、張昇浩、李重昶の三人は「よく集まって、何かいろいろ話していました」<sup>32</sup>という。

しかし、ここで重要なのは、彼らが連帯したという事実である。高麗人会という会が実際に発足していたか疑わしい面があったとしても、新しい同胞を迎えるということが要因になり、たとえ3人ではあっても、朝鮮人という民族を意識して、より強く結びつき、連帯感が生まれたことは真実であろう。それをあらわす一文がパウリスタ新聞上からうかがえる。

「今まで在伯の韓国人は、便宜上日本国籍となっていたのを、今後韓国人として、戸籍ならびに外国人登録など一切をやりかえるわけで、(韓国—引用者注)外務省とも種々打ち合わせるつもりである。」(『パウリスタ新聞』同前)

実際に外務省とどのような打ち合わせをしたのか、あるいは単なる願望であったのか、それは後日の研究に引き継ぐとして、ここでは彼らが日本国籍という、いわば負い目とも考えられる状況を一転し、新しい同胞を迎えることを切っ掛けに、自分たちも朝鮮人として活動しようとしていたことがうかがわれる。

ここで、一つの疑問が浮かび上がる。この56年青年移民を迎えたのは3人だけで、金永斗や

29 『パウリスタ新聞』1956年2月7日付。

30 全京秀、前掲書、24ページ。

31 猪股嘉雄：1919年青森県生まれ。1931年入国、1988

年サンパウロにて死亡。

32 三田幸恵：前掲出。この話は2007年8月23日に聞き取り。

朴学基の姿はない。その理由については、4章の2で若干、検討を試みる。

### 3 朝鮮人コミュニティの誕生

1956年当時、戦前に移住した朝鮮人たちは、経済的な格差はあったものの、みな持ち家に住んでいた。そして、その中から、自らが新しい同胞と積極的に関わりを持ち始めた人物があらわれた。張昇浩と金壽祚である。

一方、56年青年移民であるが、通常の移民と違い、国連を介して移住を実現しており、入国と同時に手厚い保護を受けることができたため、比較的容易に就職できたという。その一人金昌彦氏はエンジニアであったため、政府から会社を紹介してもらうことができたこと、そして、それは自分だけではなかったことばを続けた<sup>33</sup>。その他、青年の中には、神学校に進んだ後、ブラジル国外に留学するものもあらわれた。従って、例外はあるものの、彼らが戦前移民とともに働くということにはなかった。その意味で日系コロニアのようにできあがった社会に彼らが入り込んでいくという現象はない。戦前移民はあまりに少人数で、コミュニティと呼べる受け入れ集団がなかったからである。加えて、移住者が50名という集団であったがゆえに、彼ら自身、みなが一同に会するということが難しく、各自が就職や進学等それぞれの生活設計を持ち、主にブラジル南部に点在する結果となったため、小グループでの行動が中心であった。

しかしながら、このような状況の下でも、戦前移民と56年青年移民は交わり、初めてともいえる朝鮮人コミュニティを形成していくのである。

#### 1) 張昇浩を中心に

張昇浩は戦後まもなく州立市場に店舗を構え、経済的にも余裕ができた。南伯農協組合の上に住み、他人の子供も一時預かり、学校に通わせるほどの暮らしをしていた。ところが、1953年、突然政府に店を取り上げられてしまう。張昇浩の遺族である三田家の人々によると、理由は今もわからないということである。引っ越しを余儀なくされ、田舎から板を運んできて、サンパウロ市北部カニンデに流れるティエテ川沿いに、家族で家を建てたという<sup>34</sup>。当然一家は貧しい暮らしを強いられた。

その家に移住してきたばかりの青年たちが訪ねてきたのである。週末になると、約束したわけではないのに、数名が集まってきた。

「休みになると、遊びに行くところもないし、三田ハラボジ（張昇浩）のところに行くと、だれかいるだろうと思い、遊びに行くと、必ずだれかが遊びに来ていた。自然にみんな集まっていた。」（孫天基）<sup>35</sup>

張昇浩の遺族から見ると、毎日のように誰かが来ていたという。それほど頻繁に青年たちが出入りしていたということであろう。どんなに貧しい家であっても、誰に気兼ねすることもない持ち家である。しかも張の家族には年頃の女性が数名いた。もちろん青年たちの目的は何も若い女性だけではなかった。言葉が不自由なことに加え、仕事も定まらない青年もいて、「時間がたくさんあった。そして、何より、ブラジルという見知らぬ土地にも同じ同胞がいたということがうれしかった。」<sup>36</sup>と、孫天基が懐かし

33 金昌彦：前掲出。2005年7～8月、2009年8月13、17日に聞き取り。

34 三田幸恵：前掲出。この話は2007年8月23日、2009年8月8日に聞き取り。

35 孫天基：1924年ソウル生まれ、1956年入国、元タク

シードライバー。インタビュー当時はすでに年金生活者であった。サンパウロ市在住。2005年6月24、25日、他8月まで数回、同市内のレストラン、自宅等にて聞き取り。2006年4月6日、同市で死亡。

そうに語ってくれた。

さらに、後述する金壽祚を中心とした集まりとの違いは、張昇浩の家では男女の出会いがあったことである。その出会いを通じて、恋愛関係に発展した男女が出たことは自然な成り行きであろう。カップルは張昇浩の長女と二女2人に加え、大正期に移住した朴学基の長女もブラジル生まれであったが、朝鮮人青年と結ばれた<sup>37</sup>。張昇浩も青年たちを心から歓迎し、ごちそうを振る舞ったことは有名で、彼の家は人々が気軽に集う、さながらサロンのようであった。

三田家での交流については56年青年移民であれば、皆が口をそろえて語ってくれた。移住後まもなく留学していて、実際に三田家を訪れたことのない人にも、三田家で繰り広げられた温かい交流の話は仲間から語り継がれ、知れ渡っていた<sup>38</sup>。

このように、三田家は朝鮮人の憩いの場となり、同胞という一点で男女が集うコミュニティとして成立していたと言えよう。

## 2) 金壽祚を中心に

一方、金壽祚の家には、ほぼ青年男子のみが集まっていた。金壽祚には畑中つじ<sup>39</sup>という日本人女性の妻がいた。子供はなかったが猪股嘉

雄が「甥」という立場で同居していた。どういつながりから「甥」になったのかは不明であるが、金壽祚宅に出入りしていた朝鮮人や日本人なら周知の事実で、猪股本人の口からも同居していた事実を裏付ける発言がある<sup>40</sup>。また、金壽祚の葬儀に際しても、猪股はつじ夫人と並び「甥」として新聞に死亡告知を掲載するなど、実質的に取り仕切っていたと考えられる<sup>41</sup>。

金昌彦氏の記憶によると、金壽祚の家でよく麻雀をしたという。金壽祚本人はできなかったようで、青年たちとつじ夫人、猪股それに李重昶といったメンバーであった<sup>42</sup>。また孫天基氏も決まった職がなかったときは「青木」の世話になっていたという。とはいうものの、金壽祚となると、人々はあまりいい評価をせず、口が重くなる。金壽祚をめぐる様々な事件が引き起こされていたからであろう<sup>43</sup>。そのためか、この「青木」家で繰り広げられた交流に関する情報は少なかった。しかしながら、こちらの家にも多くの青年たちが訪れていたことは想像に難くない。金壽祚の家も、張昇浩とは性格の異なるサロンの役割をしていたものと思われる。それを証明するような動きが、56年青年移民入国後、1年半をすぎた頃にあらわれるのである。

36 同前。

37 金昌彦と張昇浩の二女恵美（1963年結婚）。孫天基と長女直美（交際中に病死）。後者は孫天基本人からの聞き取り。

朴アオミは1959年金亨福と結婚、3年後に離婚。最初の出会いは張昇浩の家ではないが、カニンデの張宅によく遊びに行ったことは明瞭に記憶していた。（朴アオミ：前掲出。2008年12月28日、2009年8月15日、自宅にて聞き取り。）

38 文明哲の証言：1930年、咸鏡北道生まれ、1956年入国、数年後にアメリカへ留学。現在、サンパウロ市在住。牧師。2005年7月19日、自宅にて聞き取り。

39 日本生まれ、1925年入国。1975年サンパウロ市にて死亡。

40 玉井禮一郎から猪股嘉雄への書簡内に「スウジョー

キン氏とは、例の韓国名誉領事金壽祚（日本名・青木伊三郎）氏のことですか？猪股さんが（中略）下宿<sup>マ</sup>されていた青木家の青木氏とも同一人物でしょうか？」（玉井禮一郎『拝啓ブラジル大統領閣下！』たまいらば、1984年、170ページ）。

41 金壽祚の死亡告知版（『パウリスタ新聞』1966年5月24日付け）。

42 金昌彦：前掲出。2005年、6月から8月にかけて聞き取り。

43 1963年大韓民国第1回移民に対する詐欺疑惑が最も大きな事件である。移民の入植予定地であったミラカツは地権が入り組み複雑な土地であったという。この事件に関しては先行研究、雑誌等すべてで論究されている。ただ異なる視点での研究が不十分で、まだ解明されるべき点はあるようである。



#### 4. 同胞組織と在伯朝鮮人としての連帯感

##### 1) 移民一世と韓伯人会

張昇浩宅と金壽祚宅の小さなコミュニティは、互いに対立したものではなかった。

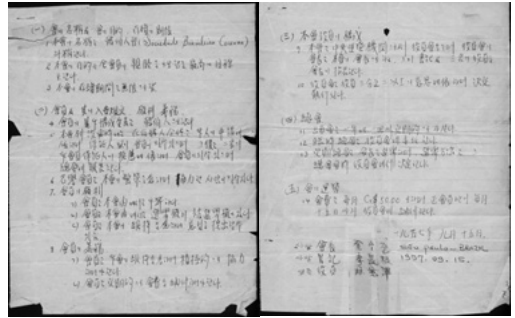
やがて、青年移民の中でも比較的リーダーシップの強い人物たちがしだいに金壽祚の周辺に集まるようになった。この金壽祚という人物であるが、戦時中にも朝鮮人の組織化を夢見たことがあったという<sup>44</sup>。組織化といっても独立運動等の意図を持つものではなく、南米朝鮮人の親睦を図る程度のものであった。恐らく、日系コロニアの発展を知る金壽祚が、朝鮮人の同胞集団を形成したいという願望の現れではなかっただろうか。

ところが、1956年に同胞を迎え、それと同様の動きが生まれたのである。そして、ついに1957年9月15日、「韓伯人会」を立ち上げたのである。実際に何名が集まり、合議したか等具体的な情報を得ることはできなかった。参加者のひとりであった林寛澤<sup>45</sup>氏は「遊び半分」だったかもしれないという。しかしそれであっても、会長等の役員のみならず、規約書まで作成したのである（写真2）。会長は金壽祚であるが、彼以外は56年青年移民である。しかも書記李長根はいわゆる「以南」出身、役員林寛澤は「以北」出身で、その当時サンパウロに住む朝鮮人の入国背景や出身地も考慮して役員を選んだことがわかる。

残念ながらこの「韓伯人会」は実動することではなく、有名無実に終わった。林寛澤氏のことば通り、軽い気持ちで立ち上げられたのかもし

写真2

「韓伯人会」の規約書の一部（林寛澤氏所蔵）



れない。しかしながら、構想のみの「韓伯人会」であろうとも、在伯朝鮮人たちが集って、民族団体という集合体を創ろうとした動きを重視したい。以前にも増して同胞意識を強めていった結果であろう。

また、規約書所有者の林寛澤氏は「韓伯人会」規則とほぼ同時期に撮影されたと思われる集合写真も保存していた（写真3）。林氏によると、何の集まりかは忘れてしまったが、背景に写っている店の看板から「青木の家」で撮影されたのは確かであるという。金壽祚宅は一階が自営の家具店、二階は住居となっていた。彼の家に集合した後、撮影されたのであろう。その写真には張昇浩を始め、彼の子ども、李重昶の姿も見え、みなが正装している点が通常の集まりではない何かを表現しているよう。張昇浩の遺族の話では、光復節等朝鮮人の式典や会合には必ず家族の誰かを伴って参加していたということから、朝鮮人にとって重要な佳節には集合するという習慣が形成されていったものと考えられる。

さて、この写真に集合している朝鮮人たちには、ある共通点がある。先に述べた「韓伯人会」

44 「青木」から聞いた話として、「戦前アメリカから『안』という人物がブラジルにやって、南米僑民会を作ろうかとお茶をのみながら、そんな話をしたことがあるという。しかし、実際に組織を立ち上げたのではない。」（金昌彦：前掲出。2009年8月13日に

聞き取り。）

45 林寛澤：1931年忠清南道生まれ、幼少期に平壤へ移る。1956年入国、会社員、サンパウロ市在住。2005年6月25日、28日、2007年8月17日等、サンパウロ市内にて聞き取り。）

写真3 戦前移民と1956年青年移民。中列向かって左より1人目李重昶、2人目林寛澤、3人目張昇浩、後列左より4人目金壽祚、5人目金昌彦。(林寛澤氏所蔵)



に集った人々も、この写真に写っている人々も、自らの意志で移住を決意した人物で構成されているということである。これは以下に述べる人物との違いとしてあげられる。

## 2) 朝鮮人というゆるやかな民族意識

一方で、この大きな集いに与していないようにみえる朝鮮人がいる。金永斗一家である。一家は、この頃には、家長、その妻、長男の三人はすでに死亡(各死亡日、注26参照)し、二男金昌洙、三男金達洙、長女金恵郷の三人になっていた。彼らは1956年の同胞出迎えにも、そして「韓伯人会」にも姿を見せていない。この件に関し、この兄妹たちは、二男14才、三男12才、長女に至っては7才という若い年齢で父親に伴い移住してきた、いわば準一世である<sup>46</sup>。その意味では、写真に並んだ人物たちとは、移住の背景には隔たりがある。それを考慮すると、

すべての行動を共にできないのもうなずける。

しかし、この家族も56年青年移民とのつながりはあった。知り合った具体的な日時の確認はとれないものの、その一人、孫天基氏が、イピランガに住んでいた金昌洙を訪問したことはすでに報告した<sup>47</sup>。その後の調査でも、ささやかな交わりを感じる複数名の証言を得られた。林寛澤氏もやはりで、金昌洙が同じ忠清南道出身であったことを記憶しており、ともにイピランガ近くのカフェで過ごしたという<sup>48</sup>。また、金昌洙の妻マリア氏は、自分が直接会うことはなかったが、イピランガの自宅には朝鮮人が訪ねてきたという<sup>49</sup>。さらに、金永斗の長女と56年青年移民仲間とのホットな出会いがあったという話も耳にすることもできた<sup>50</sup>。

このように深い関わりはなくとも、朝鮮移民の情報は伝えられ、どこかで交わっていたのである。もちろん、全体的に金兄妹と56年青年移民の交わりを示す情報は多くはない。金兄妹はそれほど望郷の念を表出することはなかったものと考えられる。金昌洙の妻マリア氏が結婚して間もない頃、朝鮮語を習いたいと言ったところ、「朝鮮は遠いし行くこともないのに、その必要はないのではないか」と夫である金昌洙にいさめられたという<sup>51</sup>。

また、56年青年移民と結婚した娘を持つ朴学基も、この集合写真にはない。この頃の朴学基は65歳前後の老人となっていた。すでに退職し、安定した職もなく、厳しい暮らしを強いられていた頃である。サンパウロ市中心部からは遠く離れた郊外に住んでいて、地理的にも経済的に

46 李重昶も入国当時16歳であったが、自らブラジル残留を決意したという点で一世と見なされる。

47 全淑美、前掲書、101ページ。

48 林寛澤：前掲出、聞き取り日等同様。

49 マリア・ローザ・ファルコーネ：1940年サンパウロ州生まれ。1958年、金昌洙と結婚。サンパウロ州モジ市在住。2002年3月15日、金昌洙は自宅にて死亡。

なお、金達洙は1986年Vargem Grande do Sulで死亡。(2009年8月11、14日、自宅にて聞き取り)

50 筆者は金昌彦氏(前掲出)からの聞き取りであるが、全京秀(1991)の調査でもほぼ同様の内容が、前掲書の20ページに記されている。

51 マリア・ローザ・ファルコーネ：前掲出、聞き取り日等同様。金昌洙は2002年3月15日、自宅で死亡。

も簡単に集える境遇にはなかったのではないだろうか。しかし、朝鮮人の血を引く娘がいると聞いて、反対に青年たちの方から出向いていったのである。金昌彦氏や林寛澤氏は、それぞれ数名の仲間と訪ねたと言い、中でも林寛澤氏は、朴学基から同郷なので娘と結婚してほしいといわれたと言い、一方、アオミ氏は、父朴学基も青年たちが訪ねてきては交際を迫ったため「怒った」という。この話は双方で食い違いがあるものの、青年たちが複数回訪問していたことがわかるエピソードである<sup>52</sup>。

このように戦前と56年青年移民の朝鮮人たちが様々な形でささやかな交わりを持つようになり、それまで個人とのつながりを維持してきた朝鮮人たちは、あるものは強い連帯感を持ち、あるものは緩やかに朝鮮人としての民族意識を保っていたと考えられる。

朝鮮人コミュニティは確実にその存在感をあらわしていった。

## 5. まとめにかえて～62年以前の朝鮮人コミュニティと新しい出会い

戦前移民は、日系コロニアの中で互いにその存在を知りつつも、戦前戦中は植民地期という背景から、個々が点在して暮らしていたことにより、集合体としてのコミュニティと呼べるものがなかった。戦後その交流が深まるが、1956年、新しい同胞の移住をきっかけに、まず、彼らに戦前朝鮮移民としての連帯感が生まれたと

言えよう。

戦前移民と56年青年移民はあくまでも対等な立場であったと考えられる。それは、56年青年移民は、戦前移民と違って、国連やブラジル政府をバックに移住していながら、どこの政府、イデオロギーに支配されるものでもなかった。その意味で自律しており、また、戦前移民も「北」「南」という思想は持ち合わせていなかったものと思われる。

一方、両者はある意味で心に傷を負って移住してきた同士でもあった。朝鮮人でありながら戦前移民は日本国籍、56年青年移民は無国籍者として入国したからである。それゆえ、互いに同胞に出会った喜びは大きく、自然に交流の輪が広がっていったのも当然であろう。やがて、一つの朝鮮人コミュニティを作り上げていったものと考えられる。

また、その輪に強く共感できたのは、自らが移住という決断を下した朝鮮人一世たちであった。ブラジルで成長した準一世やすでに老齢期を迎えていた朝鮮人であっても、それぞれの生活の中でゆるやかに関わりを示していた。

サンパウロにおける新しいコミュニティの誕生には、常に新しい移民の流入がみられた。その流入とは、上述の56年青年移民であり、そして、引き続き大韓民国期の移民である。

戦後早くから、韓国本土からのブラジル訪問者は存在していた<sup>53</sup>が、現在韓国系コロニアの人々が最も重視する出会いは、1961年6月、ブラジルにおいて国際軍人射撃大会が開催され、

52 金昌彦：前掲出及び林寛澤：前掲出、聞き取り日等同様。朴アオミ：前掲出、2009年8月15日、自宅にて聞き取り。

53 金東成は李承晩大統領の命を受け、1949年12月下旬より特使として中南米各国を歴訪を開始した。1950年にはブラジルに入国し、金壽祚と李重昶の二人に面会した模様が彼の著書に記されている（金東成、

前掲書、89ページ参照）。その他、YMC A総務玄東完らがブラジルに訪問し、さらに国際ペンクラブ大会に参加した鄭飛石は、金壽祚と直接会ったことが先行研究に記されており、これらの人々が移民を強調したという。（玄圭煥、前掲書、1012ページ参照）。

韓国からも現役軍人が参加していた<sup>54</sup>ことによって結実した。予備役大領鄭麟圭、中領李壽亨兩名と戦前移民金壽祚との出会いである（写真4）<sup>55</sup>。私的な出会いではあったが、現在の韓国系コロニアに発展するための重要な出会いであった。その後、1962年8月15日に「僑民会」が創設されるが、その過程や背景等の詳細を述

べる余裕はない。先行研究を参考にされたい。ただし、成立背景にある問題点や人物に対する評価等において新たな視点での研究が必要で、特に金壽祚は、戦後において、韓伯文化協会を築くなど、韓国のブラジル移民事業を初めて推進した人物<sup>56</sup>として研究を進めなければならない、課題は山積してる。

写真4 1961年6月ブラジルにて出会った予備役大領鄭麟圭、中領李壽亨兩名と戦前移民金壽祚。（全淑美所蔵）



54 移民第40周年行事準備委員会『ブラジル韓人移民第40周年』ブラジル韓人会、2003年、24ページ参照、ブラジル：原文ハンゲル。

55 具体的な日時は不明であるが、本文中の2名が軍服を着ていることから、国際軍人射撃大会に参加したときの写真であると断定できる。この写真は、金壽祚に「非常にかわいがってもらった」という張相基

氏が金壽祚より譲り受けたものだが、筆者に託された。（張相基：1924年平安北道生まれ、1963年入国、サンパウロ市在住。2005年8月7日、自宅にて聞き取り。）

56 「彼が、恐らく最初の専門的移民事業を試みた人物として記録されなければならないであろう」（全京秀、前掲書、22ページ）と同意見を述べている。